JOYAMA

通信 Joyama News

福岡教育大学広報誌

University of Teacher Education Fukuoka Campus Magazine

vol. 39

2017 Summer

特集1

福岡教育大学の教育実習

特集2

学生ボランティア活動で自己成長しよう

国立大学法人

福岡教育大学

vol.39

CONTENTS

02 特集1
福岡教育大学の教育実習

07 特集2
学生ボランティア活動で
自己成長しよう

12 福教大NEWS

14 授業紹介
小専理科（生命領域）（西野 秀昭）
音楽理論基礎（長野 俊樹）

16 研究室紹介
教職教育院 特別支援教育講座
中山 健 研究室

17 サークル紹介
ダンス部
吹奏楽部

18 社会連携 連載第17回

20 福教大卒OB・OG
福岡教育大学附属久留米小学校教諭
磯田 哲郎さん

直方市立福地小学校教諭
井上 尚子さん

22 TOPICS
ボランティアサークルが
「学生ボランティア団体助成事業」に採択

表紙モデルの福教大生☆

23 キャンパスからの便り

特集1

福岡教育大学の教育実習

1. 4年間を通した教育実習

現在、全国の教員養成大学は、その役割、教育研究の成果が厳しく問われています。

そんな中で、福岡教育大学では、教員としての基礎的・基盤的な資質能力を確実に習得させて各地域・学校の有為な人材として輩出できるよう、平成28年度から、初等教育教員養成課程での選修制の廃止による大学入学者選抜、新たな教育課程の編成、教職教育院を中心とした指導体制整備、英会話力向上を目指した英語習得院の設置等、全国でも例をみない改革を実施しているところです。

また、大学として教員養成に特化し、初等教育教員養成課程、中等教育教員養成課程、特別支援教育教員養成課程あわせての教員志望の入学定員も528名から615名に大幅に増員しました。

これらの改革の主要な取組として、学生の学修段階に応じた学校現場での学校教育・教職や児童生徒の実際の姿についての理解、実践的な指導力の習得の機会の充実は大きな柱となる取組です。下の表のような、教育課程での1年次の「体験実習」、2年次の「基礎実習」、3年次の「本実習」、4年次の「教育総合インターンシップ実習」による体系的な体験・実習及び課外活動での学校支援ボランティア活動により、学校現場に関わる機会の充実を図ることとしています。

4年間を通した福岡教育大学の教育実習

	実習名	目的	実習校
1年生	体験実習	児童生徒とのふれあい 教師の仕事の理解	協力学校・園
2年生	基礎実習	授業を構想する力 本実習の基礎づくり	附属学校・園
3年生	本実習	教育実践力	附属学校・園、協力学校
4年生	教育総合インターンシップ実習	教育実践力の向上	協力学校

これから、順を追って、福岡教育大学の教育実習の様子と、それらの学びがどのように連続していくかについて説明していくことにしましょう。

2. 教師の仕事がわかる「体験実習」

個別指導をしている様子

「体験実習」は、4年間を通した教育実習の出発点であるとともに大学での学修及び各学生の教職としてのライフステージの第一歩、分岐点ともなる重要な実習です。

教室で授業の様子を観察することを中心とした実習を、福岡県内で協力していただく小・中学校、特別支援学校等で3日間行います。

体験実習後の学生の声

▶私の中で「教師」というぼんやりとした仕事が、少しはっきりしたように思います。

▶「先生、就職○○小にしないの?僕、先生がいたから、久しぶりに学校が楽しいって思えたんだ。」と不登校気味の子が実習最後の日に言ってくれました。本当に泣きそうになりました。教師としてのやりがいを見つけました。

実際に学校へ行き、子供たちと触れ合うとともに、子供に教える教師という職業を体験することによって、教師としての喜びや教師の仕事の大変さを実感することができます。わずか3日間という短い間ではありますが、上記の感想からも分かるように、初めての教師体験は、感動的な体験を味わうことができるのです。

3. 授業の仕組みがわかる「基礎実習」

基礎実習とは、大学での専門教科で積み重ねてきた学修と教職に関して様々な領域・観点から学んできたことを生かし、実際の授業を通して授業構想力を具体化していく教育実習です。大学の講義や附属小中学校の研究授業の参観、「授業後の協議会（反省会）」（※1）への参加を通して、各教科等の授業を自分自身で構想していく力を身に付けることがねらいとなります。

基礎実習でチームティーチング（※2）を体験した学生の感想

▶チームティーチングに参加させていただくことで、ただ授業を観察するだけでなく主体的に参加しようという意欲も高まりました。未来に向けてとてもよい体験ができました。

※1　授業後の協議会（反省会）とは　（※以下、「反省会」という。）　**本実習に取り組む実習生（3年生）が行う授業後、その日のうちに開催される反省会のこと。**
※2　チームティーチングとは　**複数の教師が協力して行う授業方式のこと。**

1年生のときに実施した体験実習とは異なり、模擬授業を体験したり、先輩たちの「反省会」に参加したりして、授業とは何かを肌でつかむことになります。

学生は、初めて授業の組み立ての難しさに直面し、授業の奥深さに圧倒され、教材研究の必要性をひしひしと実感します。また、実際に授業の際に、示範演技を見せるなどチームティーチングに関わることを通して、来年の自分が教壇に立つイメージを具体的に描くことができ、3年生の本実習に向けての心構えが育まれていきます。

附属学校での授業参観の様子

4. 実際の教壇に立つ「本実習」

（1）厳しい授業実践と反省会

3年生になり、いよいよ福岡教育大学における教育実習の本番というべき附属学校での本実習が開始されます。

本実習とは、附属学校等で指導案を書き、実際の教壇に立つ研究授業を通して教育実践力を育成する実習のことで、以前は、教育実習といえばこの本実習のことを指し、3年生になっていきなり実習を体験していました。しかし、現在では、1年生の体験実習、2年生の基礎実習を経て十分な心の準備と、基礎的な知識を身につけて本実習に臨むことができます。

3週間という長期にわたり、子供たちと触れ合うとともに実習生にとって念願だった、教壇に立っての授業を初めて経験することになります。それだけに授業に伴う緊張感とプレッシャーは相当なものがあります。実習生は、附属学校教員の指導を受けながら、何度も指導案を書き直し、これでもかという程の教材教具を準備して授業に臨みます。どれほどの準備をしても、授業は甘く

体育館での全体指導の様子

初めての授業

体育の授業

はありません。思うとおりに流れないもどかしさや、思いがけない子供の反応に立ち往生することもありますが、その際には附属学校教員との協働により授業を進め、子供たちの学びが停滞しないようにしています。

緊張感あふれる授業実践の後には、その日の授業の「反省会」が待っています。附属学校教員から、そして共に実習をする仲間からも、厳しい質問や意見が飛び交います。仲間同士で厳しい意見のやりとりをすることは、自分が「反省会」の審議を受ける立場になったときも手を抜かないで欲しいという意志の表れであり、場に真剣勝負を思わせる緊迫した空気が張り詰めます。ときには、思うように授業ができなかった悔しさから、実習生の目に涙が滲むこともあります。授業時間とは、無垢な子供たちの生涯に影響を与える神聖な時間であり、どれほどの厳しさをもって臨んでも厳しすぎるということはありません。授業技術や教材解釈の力だけではなく、そうした授業に対して真摯に向き合う姿勢も、この本実習を通して実習生は学んでいくのです。

反省会の様子

(2)感動的な子供たちとのお別れ

教壇に立っての授業、給食や休み時間における子供との交流、多忙を極める学校行事の補助など、慌ただしくも価値ある3週間を過ごした実習生達は、短い期間でありながらも数多くの思い出を残した実習校から去ることになります。

実習期間を乗り越えたという満足感と開放感は言葉では表せないほどのものです。しかし、実習生の笑顔はなぜか寂しそうです。それは、3週間を一緒に過ごし、心が通い合うようになった子供たちとの別れが待っているからです。

授業中、なんとか未熟な発問に答えて実習生を助けようとする子供たち、休み時間になると、腰や肩にぶら下がってきて離れようとしない子供たち、そんな愛しい子供たちとの別れは、この上ない寂しさを実習生の心にもたらします。

最終日には、子供たちと実習生との「お別れの会」が催されますが、この場では実習生だけでなく、ほとんど全ての子供たちが号泣し、泣き声に溢れた教室の様子は、それは感動的なものです。実習終了後に教師になる決意が固まったと答える学生が多くいます。それは、授業や生徒指導などの具体的な体験をしたこともありますが、この子供たちとの涙の別れを体験することに大きな意義があるのです。

お別れの会の様子

本実習を終えた学生の感想

- ▶朝から子供の笑顔を見るだけで、今日もがんばろうと思うことができ、本当に子供がくれるパワーはすごいなと感じることができました。
- ▶教育実習で教生として子供たちと関わることで本当に教師になりたいと思えるようになってきました。教員を志す者が周囲にたくさんいる環境は、福岡教育大学の大きな利点であり、この大学に来て良かったと本当に思います。
- ▶私の授業があると知って「やったー」と声を出して喜んでくれ、授業の終わりには「先生の授業楽しかった」と言ってくれる子供たちのためにもっと楽しい授業をしてあげたいと思いました。

5. 教師を丸ごと体験する「教育総合インターンシップ実習」

3年生の本実習を終了し、いよいよ現場へと巣立つ前の4年生が取り組む大学最後の教育実習が教育総合インターンシップ実習です。すでに指導案を書いての授業も経験し、学級経営の基礎を学び終えた4年生の実習希望者が、そうして身につけた力を実際に現場の教室でもう一度体験し直すことによって教育実践の現場で働く自覚と自信を身につけていきます。10日間の実習期間中は、協力校の1教室に入れてもらい、担任の先生の補佐を行います。このことによって担任としての一日を身近で経験し、自分が現場に出て担任となったときのシミュレーションを行います。この実習は、すでに現場での戦力として活躍できる4年生が担任の手伝いをするわけですから、協力校も他の実習以上に学生に期待し、より現場で生きる教育実践力を身につけることができます。

個別指導の様子

先輩にインタビュー

赴任されてから約2ヶ月が経ちましたが、感想を教えてください。

新しいことの連続で、慣れないことも多いですが、担任を持って小さな成長が大きな感動に変わっていきます。この職について良かったと思いましたし、やりがいがあります。

教育総合インターンシップ実習に、参加してみてどうでしたか？

子供への関わり方、声かけの仕方などを学びました。教師の発言が、発問、指示、説明、賞賛の4つであることを学びました。また、聴くことの意味、目と耳と心で聴くことの大切さを学びました。

教育総合インターンシップ実習校に初任者として赴任してどうですか？

2つの良い点がありました。1つ目は、教職員の先生方を知っているということです。先生方との人間関係ができているので、相談がしやすいです。2つ目は、子供たちをよく知っているということです。子供たちが、声をかけてくれたり、一緒に遊んでくれたりします。

教員を目指す後輩へのメッセージをお願いします。

附属では、授業中心ですが、教育総合インターンシップ実習に参加すると、子供理解、学級経営、生徒指導、学級事務など、様々な体験ができ、現実を知ることができるので是非参加した方が良いと思います。

宗像市立日の里東小学校教諭
伊藤（いとう）　夏美（なつみ）さん
初等教育教員養成課程幼児教育選修
（平成29年3月卒業）

特集2

学生ボランティア活動で自己成長しよう

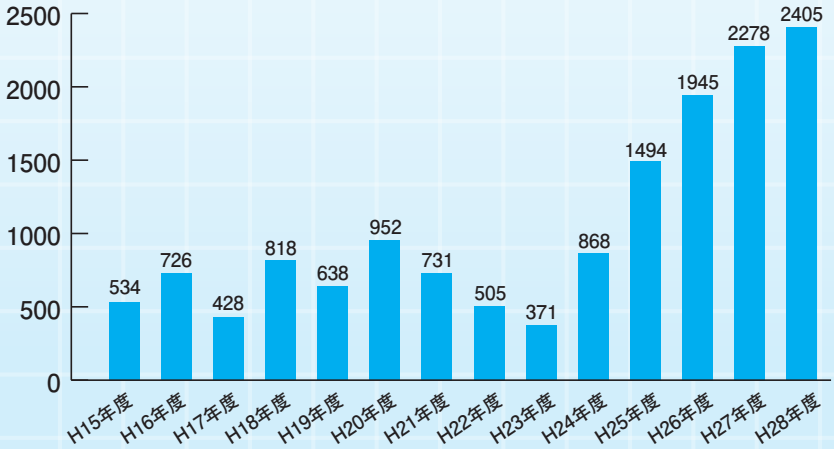
本学では、学生ボランティア活動推進本部を組織し「学生ボランティア活動の推進に関する基本方針」に沿って、福岡教育大学の専門性を活かした学生ボランティア活動を教育の一環として位置づけ、推進しています。学生ボランティア活動の3つの理念「つなぐ」「であう」「つくる」に基づき、地域社会と大学をつなぎ、出会いや体験による学びの機会を多く与え、明日の学校や地域社会の創造に必要な力を育成し、地域社会に貢献するとともに、学生の教育実践力の向上など様々な資質能力を涵養することに取り組んでいます。

【学生ボランティア活動の支援体制と現状】

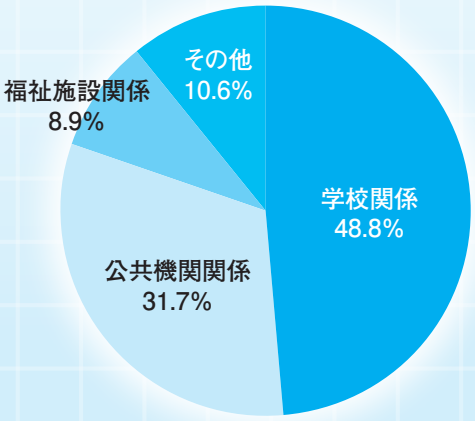
1. 6つの支援体制と4年間を見通した体系的な支援

本学の支援体制は、次のとおりです。インターネットを活用した「ボランティアサポートシステム（UTEFVSS）」の運用、教員（講座）による案内等、ボランティア活動サークルによる活動、学生支援課を介してのボランティア活動、「学生ボランティア活動認定システム」等での支援を行っています。ボランティア依頼件数や学生の参加者数が、年々増加し、昨年度は延べ約2400名の学生が参加している状況です。学生ボランティア依頼件数404件の依頼機関別比率は、下図のとおりです。

学生ボランティア参加人数の推移



依頼機関別比率

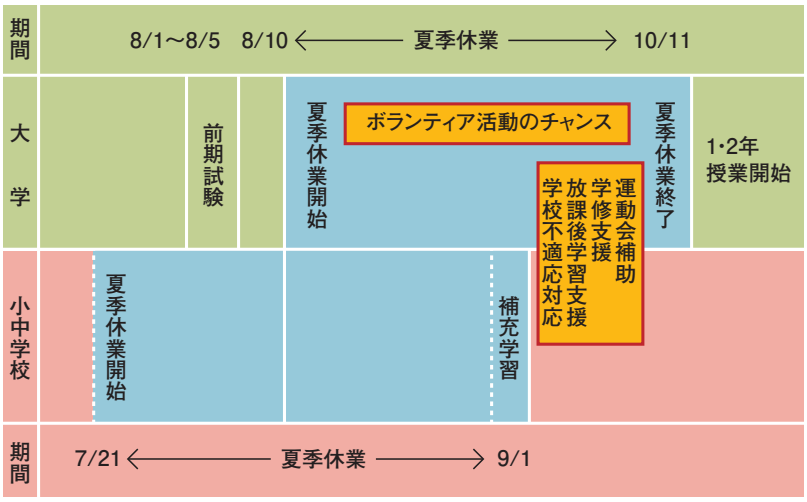


〈長期休業中の短期集中型ボランティア活動〉

本学では、3年生以外の学年は、長期の夏期休業（8月10日～10月11日）の約2ヶ月間を利用して、郷里の教育事情を学ぶ好機と捉え、大学近隣の地域や郷里の出身校での学校支援ボランティア活動に取り組んでいます。

平成28年度は、沖縄県から茨城県まで保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校はじめ、コミュニティセンターや学童保育所などで学習支援ボランティア活動に約100名の学生が取り組みました。

日常的にボランティアに行く機会の少ない学生にとっては、長期休業中はボランティアに行く機会が得られやすくなること、また、ボランティア経験者にとっては、異なる校種を経験する機会や、学校や地域の違いを経験する機会となっています。

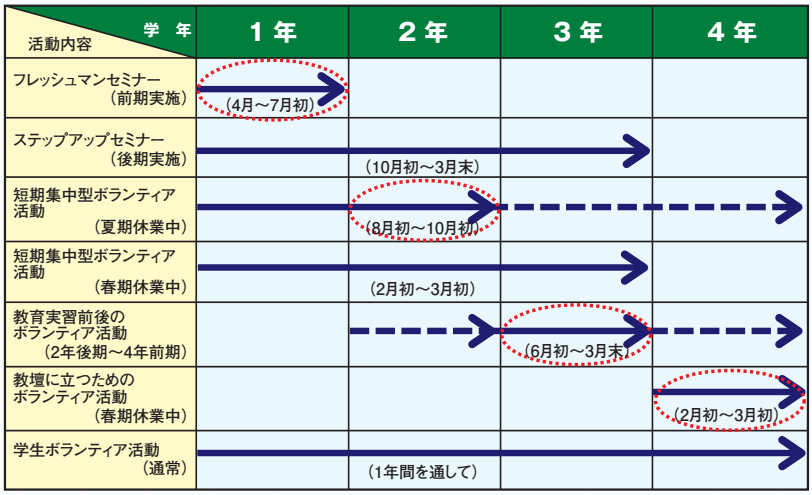


〈4年間を見通した体系的な支援〉

右の図が示すように、1年生にフレッシュマンセミナーを受講させ、本学の学生ボランティア活動の意義や役割について理解を深めています。2年生や3年生には、前述した夏期や春期の休業期間を利用したボランティア活動を実施しています。

また、3年生での教育実習前後の学びを生かした学校支援ボランティア活動、さらに、教育現場に出る直前の4年生を対象とした「教壇に立つための学校支援ボランティア活動」を通して教師としてのキャリアアップが確実に図られるように意図的、計画的に支援しています。

〈福岡教育大学4年間を通した学生ボランティア活動の取組〉



2. 学生ボランティア活動認定システムについて

平成27年度入学生から、「学生ボランティア活動認定システム」を導入し、ボランティア活動に取り組んだ時間数や内容に応じて、サポーター、チーフ、リーダーの資格を認定し、授与しています。これは、ボランティア活動を行った学校等の担当者から評価を受けて、学生の自己評価や大学教員等の面談や書類審査を経ての授与となります。これにより、社会的通用性を確保し、大学としての地「知」の拠点化をよりよく担うことのできる教員を育成する取組を行っています。平成28年度は、チーフ1名、サポーター39名を認定しました。学生が目標を持ってボランティア活動に参加し、自ら高みをめざしてこれからの教員に必要な資質能力としての社会問題に気づき、自ら判断して行く姿勢を持つこと、問題を解決するために多少の困難を乗り越える柔軟な意志力、自ら地域社会に働きかける力、先輩や同僚、教師や子ども、保護者や地域の方々など人とかかわり、人間関係をつくる力など身に付けるためのものです。学生ボランティア活動を通して生の教育現場や地域での様々な活動を経験し、積み上げることで教師に必要な実践的指導力である学習指導力や学級経営力、子供との温かい人間関係、さらに、保護者や地域対応力の土台を身につけ信頼される教師となれることを期待しています。

認定証授与式の様子

3. 具体的な学生ボランティア活動の様子

本学の学生は、宗像市、福津市、古賀市、岡垣町などの近隣地域ばかりでなく、福岡市、北九州市の政令市や久留米市の保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校で学校支援ボランティア活動に取り組んでいます。また、地域のコミュニティセンターや少年自然の家などの社会教育施設や福祉施設などのイベントを中心とした地域支援ボランティア活動に取り組んでいます。半年から1年を通して、長期期間参加している学生も毎年増えてきています。また、東日本大震災後の震災復興支援ボランティア活動に参加する学生も毎年続いています。

〈学校支援ボランティア活動の様子〉

幼稚園での保育活動支援

小学校での学習指導支援

中学校での学習指導支援

【学生ボランティア活動後の学生の感想】

私は、赤間くるみ幼稚園の日常の保育活動やイベントのボランティア活動に1年間参加しました。このボランティア活動経験で学んだことは、幼児の発達段階の実態に応じた保育が大切だということです。先生は、活動の中で学ぶことを重要視され、幼児を見守りながら必要なときのみ援助して幼児の主体性を育んでいました。子供の主体性を生かす具体策や実例など学びの多いものになりました。また、後援会との結びつきが密であり園と家庭が一体となって園づくりをされている姿を目の当たりにして、チーム全体で取り組むことの素晴らしさを感じました。大学生活4年間の中だからこそ、ボランティア経験を積み上げてほしいです。

初等教育教員養成課程 家庭選修 4年　**水野（みずの）　亜由香（あゆか）さん**

書道科の先輩方から受け継がれてきた宗像市立大島中学校の書道教室のボランティア活動に今年は、私が行かせていただきました。普段は筆を持つことが少ない生徒に「書道って楽しい。」と思ってほしい一心で、アニメやスポーツに絡めて指導してきました。すると、みるみるうちに上達していき、その姿に感激しました。大島中は、全校生徒17人の小規模校ですが、先生と生徒、そして、島の方々との距離も近く、人との関わりが勉強になりました。今までのボランティア活動で得たもの、さらに、今回のボランティア活動でつけた自信を武器に教育実習に取り組みます。

中等教育教員養成課程 書道専攻 3年　**野田（のだ）　結香（ゆうか）さん**

4年間学生ボランティア活動に取組、本年度採用され日の里西小学校教諭となった枝連加奈さん

私は、4年間、ボランティア活動をさせていただいた学校に採用されました。ボランティア活動の経験がどのように生きたか、2点をお話しします。1点目は、学校の経営方針が理解できていた点です。学力を向上させるために行っている取組や学校の経営目標を採用される前から理解できており、スムーズに学校の一員として学校生活をスタートできました。2点目は、児童の指導の仕方を少しながら理解できていた点です。褒める、叱るタイミングや学級経営の仕方などボランティアをしていたからこそ知ることができていたのだと思います。

このように、ボランティア活動をすることは教員になろうと思っている皆さんにとって良いことしかありません。ぜひ、ボランティア活動をしましょう。

宗像市立日の里西小学校
教諭 枝連（しれん） 加奈（かな）さん
初等教育教員養成課程数学選修（平成29年3月卒業）

数多くの学生ボランティア活動を受け入れていただいた校長先生の声

毎年、福岡教育大学より多数の学習支援ボランティアの申し込みをいただいています。本年度も17名の学生が学習支援を行っています。教育大のボランティア活動の特徴として次のことが上げられます。1つは、教育について専門的に学んでいるので、職員からのアドバイスを受けるとあっという間に子供に適した接し方を身に付けるということです。2つは、ボランティアを続ける期間が長いということです。数年にわたり経験を積むことで実際の教育現場がわかり、職員からの信頼も厚くなっています。

何と言っても、学習支援を通して子供の成長の喜びが感じられること、これが長く続ける1番の目的でしょう。教職への志を持つ福岡教育大学の学生ボランティアならではの特徴です。そのような経験を持つ新規採用者は、大学での学びを教育現場で体験的に理解した強みを持っています。経験者を新規採用者として迎えられて大きな力となっています。

宗像市立日の里西小学校
校長 有馬（ありま） 昌一郎（しょういちろう）先生

〈地域支援ボランティア活動の様子〉

コミュニティセンターの行事支援

寺子屋事業での学習支援

地域の方との打ち合わせ

【アンビシャス広場でのボランティア活動後の学生の感想】

1年生の時に体験実習でお世話になった小学校で、アンビシャス広場のボランティア活動に実習終了後から継続して参加しています。広場には、1年生から6年生まで一緒に活動し、低・中・高学年の児童と一同にかかわることができるので、発達段階の違いを学んでいます。活動中に児童館でのトラブルが発生することもありますが、それをどのように対応すればいいのかは、実際の現場で経験しないとわからないと思います。小学校の教師をめざす私にとって、ボランティア活動はとても重要であり、これからも続けて成長していきたいと考えています。

初等教育教員養成課程 2年　竹末（たけすえ）　大朗（たろう）さん

ボランティアコーディネーターからのメッセージ

「『絶対に先生になる。』という決意が固まったのは、学生支援課の先生方や子供たちに出会えたおかげです。」これは、福岡市の小学校教諭として採用された女子学生の言葉です。この学生は、ボランティア活動を通して、子供理解が全職員、共通理解のもと行われていることや、学校組織がチームとして動いていることを実感しています。皆さんも学校支援ボランティア等に参加して、キャリアアップを図ってください。

ボランティアコーディネーター　羽原（はばら） 哲男（てつお）先生

教室は、多くの成果達成と解決困難な問題が待つ世界です。学生ボランティア活動で教育現場を体感し、指導技術や学級経営を学ぶことは、教職に適応する礎になります。学校支援に参加した学生は、「先生方の生き生きとした姿や子供を思う気持ちに感銘を受け、大切な指針となった。実践的な学びができ、1日も早く現場で働きたい。」と言っています。学習支援に出かけ子供達の輝く瞳に触れると、教職へのモチベーションが上がりますよ。

ボランティアコーディネーター　木原（きはら） 貞美（さだみ）先生

学生ボランティア活動に自ら取組、実感してほしいことは、「①子供のまなざしや笑顔、活動の姿から味わえる感動」「②教えてほしい、ともに活動したいという子供の思いや願いから得られる使命感」「③地域の方との関わりを通して見えてくる地域のつながりや地域社会の成り立ちや仕組み」です。ボランティア活動で職場適応力を身につけ、教育現場を経験し、学習指導力とともに、多少の困難も乗り越えられる柔軟な意志力や保護者や地域対応力等を育み、めざす教師になってください。

ボランティアコーディネーター　坂田（さかた） 紳一（しんいち）先生

福教大 NEWS 1 特別支援教育公開セミナー「ドイツの特別支援教育における現状と課題」を開催

福岡教育大学教育総合研究所附属特別支援教育センターでは、平成29年5月16日（火）、ドイツのカール・フォン・オジエツキー大学オルデンブルク（以下、オルデンブルク大学）より、ギゼラ C. シュルツェ教授、ハインリッヒ・リッキング教授をお迎えし、「ドイツの特別支援教育における現状と課題」と題して、第16回特別支援教育公開セミナーを開催し、本学の学生・教職員、地域の関係者など約120名が参加しました。

リッキング教授からは、主として、ドイツにおけるインクルーシブ教育の進展について、この15年の間に、特別な支援を必要とする児童生徒の通常学校で教育を受ける割合が、2．5倍以上に増加している現状について説明がありました。

続いて、シュルツェ教授からは、オルデンブルク大学における特別支援教育の各分野及び教員養成の仕組みとともに、リハビリテーションと教育の融合についての説明がありました。教員養成課程においては、学生は分野から2つの障害種を専攻して学習し、特に重要なのは、学生時代に理論を十分に学び、身につけることであり、ドイツの学生達は学習量の多さに苦労しているというエピソードの紹介がありました。

質疑応答では、本学学生との間で障害者の就労問題などについて、活発なやりとりがなされ、充実したセミナーとなりました。

ハインリッヒ・リッキング教授による講演

ギゼラ C. シュルツェ教授による講演

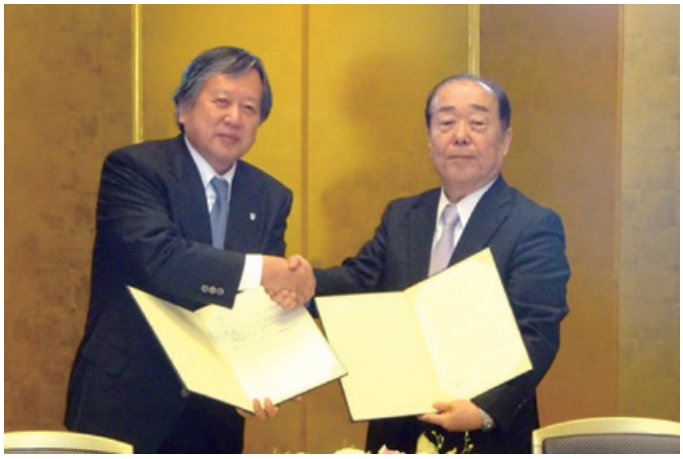
本学学生との質疑応答

会場の様子

福教大 NEWS 2 九州初！全国の教員研修のナショナルセンターと連携協力協定を締結

独立行政法人教職員支援機構（旧教員研修センター）（茨城県つくば市に所在）は、全国の教員研修のナショナルセンターとして、九州各地域をはじめとする全国の学校教育関係者を対象とした研修等を実施しており、各研修の修了者は各地域・学校の中核的な教職員として活躍しています。（これらの研修には、「キャリア教育指導者養成研修」で本学教職大学院西山久子教授が講師を務めるなど、高い実践力を有する教職大学院の教員等が参画しています。）

同機構との連携は、教員養成・研修のハブ的な機能をめざす教職大学院をはじめとして本学の教育研究の充実に重要な意義、効果をもたらすことが期待されることから、平成29年3月7日（火）に本学と同機構との間の連携協力に関する協定を締結しました。



協定を取り交わす櫻井学長（左）と髙岡理事長

本学では、本連携協力協定締結により、本学の教育学部及び大学院での教育研究の充実、教員の資質向上のためのプログラムの開発等による教員養成・研修機能の充実を一層進めてまいります。

福教大 NEWS 3 全学一斉の地震総合訓練を実施

平成29年6月8日（木）に、震度6強の地震が発生したことを想定した全学一斉の地震総合訓練を実施しました。

本訓練は今年で7回目を迎え、約1,000名の学生、教職員等が参加しました。参加者は地震発生のアナウンスと同時に身の安全の確保、避難場所への避難や避難完了の報告、初期消火訓練など、一連の訓練に緊張感を持って臨みました。

訓練終了後、宗像地区消防本部から「実際に大規模災害が起きた場合は、自衛消防が大切になる。学生の皆さんは、学校などで防災の指導をする側に立つことも踏まえ、今後とも防災を意識してほしい。」との講評をいただき、また、櫻井学長から「災害がいつ発生しても対応ができるよう備えるとともに、学生の皆さんには、我が身を守り、仲間を守ると共に、実習やボランティア先で、子供達などを守れるよう、本日の訓練を活かしていただきたい。」との総括が述べられました。

なお、今年度は、新たな安否確認システムを導入し、従来の学生の安否確認に加え、教職員も含めた安否確認メールの送受信訓練が行われた。学生の返信率も年々上昇しており、防災意識の向上が感じ取れる結果となりました。今後も、訓練を重ね、本学においても、いつ起こるか分からない災害に対応できるよう努めて参ります。

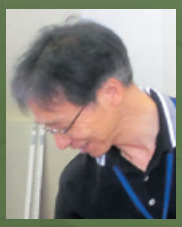
避難場所へ避難した学生と教職員

消火器を使用した初期消火訓練

総括する櫻井学長

小専理科（生命領域）

教職教育院・理科教育講座（生物）教授　西野 秀昭



教員プロフィール

西野　秀昭（にしの　ひであき）

九州大学大学院理学研究科博士後期課程修了（理学博士）

大学院以来の専門「生化学」をベースに、文部省（当時）在外研究員（米国ペンシルベニア大学）から「分子生物学」を加え、平成17（2005）年の本学着任からは小・中・高等学校の「理科（生命・生物）授業での観察・実験の工夫・改善・開発」にも取り組んでいます。

適切な教材を用いる力を身につけさせる

小専理科は、他の小学専門科目とともに教育内容科目として、小学校教員として指導する教科等の内容の理解とともに、理科の指導に際して適切な教材を用いる力を身につけさせるために開設されています。

小専理科は内容がさらに4つの領域、エネルギー（物理）・粒子（化学）・生命（生物）・地球（地学）に分かれます。各々の領域で、学生は上記の目的を達成するための授業を受けます。

小学校理科（生命）の観察・実験には難教材が多い

小学校の理科・生命領域では、生物教材の扱いが困難、観察・実験を教科書通りに実行しても結果が得られ難いなど様々な支障があります。そのような実態を小学校の先生方へのアンケート調査等で明確にし、工夫・改善や新しく生物教材を開発する研究を、本学着任以来行っています。その研究成果を踏まえて、授業でも観察・実験の結果が得られ、子ども達が科学的に適切な考察を行えるように小学校の先生方へ工夫・改善・開発した観察実験を学生へ紹介し、実際に取り組んでもらっています。

授業計画を立てやすく結果が得られやすい生物教材を選択する

授業では成長がはやく一晩で発根し、数日の栽培で日光や肥料のはたらきを調べることができるアブラナ科（菜の花）の一種を用いています。（※写真①）

写真①　成長がはやいアブラナ科植物を使います。

教科書の生物教材ではなかなか発芽・発根しないこと、日光をさえぎると徒長して逆に背丈が高くなってしまい、植物の成長の理解に子ども達が困ることがあります。それに対応して科学的で適切な考察が出来る結果が得られることを授業で確認するとともに授業計画を立てやすいことを実感してもらっています。

特別な支援が必要な学生への対応や学びの機会均等化

特別な支援が必要な学生が受講する場合には、例えばノートテーカーのボランティア学生（※写真②）の作業場所も適切な場所を確保し、事前に生物教材を見てもらうこともあります。また、どの学生の学びの機会も均等になるように実験班の実験台を規則的に毎週変えることで、名簿の後ろの学生が不利益にならないよう心がけています。

写真②　ノートテーカーボランティアの学生達

身近なもので理科の授業を構成する

小学校の理科授業で使える教材費は子ども一人当たり年間500円ほどと言われています。従って理科授業で使う教材は安価なものや再利用などを視野に入れて選ぶ必要があります。この授業で紹介する教材は、ホームセンター等でも手に入る安価なものや、これまでは廃棄されていたような容器等を実際に使っています。（※写真③）

写真③　班の皆で顕微鏡観察のプレパラート作り。スポイトはストローを使います。

顕微鏡観察像は、スケッチではなく画像をスマートフォン（タブレットの代用）で撮影する方法も修得しています。（※写真④）

写真④　顕微鏡でオオカナダモ（上）、ツユクサの気孔（下）を観察し、接眼レンズからスマートフォンで画像を撮影。小学校でのタブレット導入を意識した観察方法を体験します。

生命尊重の観点から生物教材を大事に扱うこと、例えば実験で使った植物もゴミ箱には捨てないなど道徳教育にも通じる対応を学生には求めています。

音楽理論基礎

教職教育院・音楽教育講座 教授　長野 俊樹

教員プロフィール
長野　俊樹（ながの　としき）
東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻修士課程修了。芸術学修士。
専門は西洋音楽史。特に18世紀後半～20世紀初めのドイツ音楽の歴史と理論。
福岡市内では、一般の方々向けの啓蒙的な講演も行っています。

音楽と音楽理論

音楽は自然の産物ではありません。音を鳴らして並べれば、おのずと音楽になるわけではありません。音響の背後にあって、音楽を音楽として成り立たせているもの、それが音楽理論です。だから、音楽理論を理解し、使いこなすことができなければ、音楽をきっちりと捉えることはできないし、ましてや教えることなどできないのです。

何を学ぶか　なぜ学ぶか

「音楽理論基礎」は、中等教育教員養成課程音楽専攻（中等音楽）1年生の専門科目です。ここでは、17世紀～20世紀初めのヨーロッパ芸術音楽の基礎理論を中心に扱います。

その理由は、第一に、現代の日本人が普通に接している音楽のほとんどが、その理論に基づいて作曲されたり演奏されたりしているからです。そして第二に、それが学校教育の現場で教えられているからです。

はじめの一歩

この授業は、音楽についての理論や歴史、演奏や教育法などを、4年間にわたって学ぶための基盤になります。つまりは、中等音楽の学生にとって最初の関門なのです。

授業の様子
授業は、楽曲のフレーズをピアノで演奏したり、音楽CDを流したりしながら進めていきます。
（この日は、ドビュッシーの前奏曲集第1巻より第2曲「帆」、第10曲「沈める寺」を鑑賞。）

$A+B=C^2$

教職教育院 特別支援教育講座 中山（なかやま） 健（たけし） 研究室

20年目の研究室

平成9年の10月に赴任しましたので、今年の10月で中山研究室は20年を迎えます。この間、特別支援教育センターの教育相談や臨床サービスを通してさまざまな子どもと保護者に出会ってきました。みんな成長して大人になり社会で活躍しています。中には結婚して幸せな家庭を築き、子育て中の人もいます。

巡回相談から学ぶ

地域の保・幼・小・中・高の学校園を訪問して特別なニーズのある子どもの支援について助言しています。単発で訪れる学校園もあれば、定期的に訪れるところもあります。定期的な訪問を何年も続けていると、その子どもの生育歴について担任はじめ学校関係者の誰よりも詳しくなっている時があります。「君のことを小さい時から知っているよ、そして見守っているよ」という具合にです。長期的な視点で子どもに関わり、その時々の教育関係者とやりとりをしながら相談に乗れることが私の役割なのだと自覚するようになりました。

子どもから学ぶ

研究室では発達障害のある子どもに関する研究や臨床活動に取り組んでいます。特に近年力を入れていることは、学習支援用のiPadアプリを作って子どもに指導することです。読むことに困難がある子どもを対象に、英文の読みを学習するアプリを毎週作り、それをiPadにインストールして教えています。このような取り組みができる研究室はおそらく珍しいだろうと思います。他にも仮名文字や漢字熟語の読みを学習するアプリ、足し算・引き算・割り算等のアプリを作ってきました。現在20個の中山研究室オリジナルアプリがあります。それらを小中学校の特別支援学級や通級指導教室、特別支援学校に提供してきました。商品の値段に合わせてお金を支払う学習ができるアプリを作り、それを小学校の知的障害特別支援学級の児童に実践して卒業論文にした学生もいます。オリジナルアプリの良さは、子どもがどのように取り組むかに応じてアプリの仕組みを変えることができる点にあります。効果音を嫌う子どももいれば、とにかくいろいろなボタンをたて続けに押してしまう子どももいます。取り組む様子を見て、その子にあったアプリとなるよう修正を加えることができます。

研究室での学び

研究会では、臨床活動の他に学生たちと特別支援教育に関する様々な文献を読んで学習を深めています。数少ない男子学生とともに女子会ならぬ男子会を時々開いています。もちろん、女子学生も参加できます。

地域の特別支援教育を担う先生たちが集まって勉強するサークル活動に参加しています。一人一人の先生が抱える悩みをみんなで考えたり、テーマを決めて勉強したりしています。

研究室集合

研究会

サークルの勉強会

買い物アプリ

子どもたちの指導

ダンス部

Dance Club

私たちダンス部は、現在部員43名で活動し、週に3日、練習に励んでいます。大学からダンスを始めた人がほとんどですが、先輩に基礎から教わり、自主練習を重ねることで、ダンス技術の向上を目指しています。また、学年を問わず仲が良く、楽しみながらダンスに打ち込んでいます。

イベントは年に8回あり、「博多どんたく港まつり」や本学の大学祭など、様々なイベントに出演させていただいています。そして、毎年2月に行われるダンス部の公演はダンス部最大のイベントであり、一年間の集大成となります。会場取りから演出までプロの照明さんや音響さんに協力していただきながら、一から自分たちで公演を作っていきます。大変なこともありますが、終わった後の達成感は何ものにも代えがたいです。

ダンス部は、見に来てくださった方々や支えてくださっている方々に、元気や幸せな気持ちなど何か心に残るものを感じていただけるようなダンスを目指し、これからも精進していきたいと思っています。

もし機会がありましたら、ダンス部のイベントにぜひお越しください!

初等教育教員養成課程　幼児教育選修　3年　吉村 友紀

吹奏楽部

Brass band

私たち吹奏楽部は、現在部員53名で日々練習に励んでいます。今年度は年間目標を「駆動響心」と掲げ、部員一人一人が演奏を聴いてくださる方の心に響く演奏をしたいという思いを持って演奏し、様々な演奏会や行事に参加しています。また、私たちは学生バンドとして、運営面や音楽面全てを学生のみで行なっており、お互いに意見交換をしながら、良い音楽を届けようと一丸になって活動に取り組んでいます。部員同士は仲が良く、楽しみながら、やるときはやるというメリハリのある雰囲気で練習をしています。

私たちは積極的に演奏会や大会に出場しており、昨年度は第52回定期演奏会を開催し、九州吹奏楽コンクールでは金賞を受賞しました。また、部内でのアンサンブル発表会、地域の病院や施設での演奏、学内でのアンサンブル披露など、様々な場所で活動を行っています。今年度はより一層上を目指して、精一杯日々の練習に取り組んでいこうと思っています。

吹奏楽部では現在も部員を募集しています。初心者・経験者を問わず、少しでも吹奏楽に興味のある方はぜひ吹奏楽部に遊びに来てください。

特別支援教育教員養成課程　初等部　3年　阿多 愛佳

社会連携

研究連携

学校、教育委員会等との連携

福岡教育大学では、学校、教育委員会及びその他の機関・団体との連携事業や共同研究を推進し、その成果を積極的に社会に還元します。

連載第17回

宗像市教育委員会と本学との学びのパートナーシップ事業「放課後の学習支援事業『ブリッジ』」

義務教育の現場では、児童生徒への学習支援事業の関心が非常に高く、本学においても、学生ボランティア活動の一環として、地元活動団体等への派遣、及び近隣の複数自治体との連携事業として実施してきました。このたび、地元宗像市教育委員会との連携により、市内の小中学校の児童・生徒を対象とした「放課後の学習支援事業『ブリッジ』（略称:「放課後ブリッジ」）」を平成28年度に立ち上げ、平成29年度も継続して実施中です。特に離島・地島においては、本学学生が週末に泊まり込む全国でも珍しい形態を取っており、注目を集めています。

1.「放課後ブリッジ」とは

放課後の学習支援を希望する市内学校（主に小学校）において、毎週1回（地島の場合は月に3回程度）、学習が苦手な児童・生徒を対象に、本学学生がボランティアで学習支援を行う事業です。

児童・生徒の基礎学力の向上を図りたい宗像市教育委員会と、新たな社会連携の形を模索し、また学生に教育実習以外でも様々な教育現場の経験を積ませたい本学との互いのニーズとシーズが合致し、平成28年9月にスタートしました。

実施にあたっては、宗像市教育委員会の田中一郎教育連携コーディネーターが事業全体を、また、学校教育講座の鈴木邦治教授が本学学生のコーディネートを担当し、学生スタッフの指導をきめ細かく行っています。

平成28年度については、小学校10校、中学校3校からの要望に基づき、延べ623名の学生を派遣しました。派遣にあたっては、各学校の支援児童数等に応じて複数の学生スタッフを振り分け、学生同士でローテーションを組んで対応しました。定期的に同じ学生が同じ学校を担当することで、子ども達は早い段階で学生に慣れ、また教員を目指す学生にとっても、派遣先学校の現職教員を間近に見ることで「教員になりたい」というモチベーションの維持につながるなど、双方にとってWIN-WINの関係にある事業となっています。

2.地島における支援の状況

この事業の特色のひとつに、これまで放課後の学習指導を受ける機会がなかった離島・地島の小中学生も対象になっている点が挙げられます。

本学学生は金曜夕方の定期船で地島へ出向き、子ども達へ指導した後に島の施設に宿泊し、翌土曜日は船の出発時間まで子ども達と一緒に遊んだり、学校等の行事に参加したりして過ごします。地島の皆さんは、「島の活性化にもつながる」と好意的に受け止めてくださっています。

平成28年度に参加した学生達からは、「子ども達以外にも保護者や島の人たちとの距離感がとても近いと感じています」「これまで自分が経験していないこと(＝複式学級など)を経験できる貴重な機会だと思います」「魚のさばき方を教えてもらって嬉しかったです」などの感想が寄せられており、平成29年度も引き続き地島での支援を行う予定です。

離島の学校は、複式学級など、本学学生があまりなじみのない教育形態を有するところが少なくありませんが、実際に支援を行うのは主に経費面で難しい側面があります。この「放課後ブリッジ」事業で学生の旅費等を宗像市教育委員会が負担してくださることにより、定期的な実施が可能となりました。地島への支援を通じて、本来の目的に加えてへき地教育の実態を学べることは、本学学生にとって非常に有意義なことです。

地島は宗像市の沖に浮かぶ人口約160人の離島。
神湊港から約5kmの場所に位置し、島の周囲は9.3 km。

学習支援事前打ち合わせの様子

地島小学校の運動会に参加した時の様子

生活に寄り添い、多様な教育ニーズを実践的に学ぶ

学校教育講座
鈴木 邦治 教授

「地島における支援」は、九州地域が抱える離島教育やへき地の教育課題の解決に資する教員を養成する「地域創生」プロジェクトの第一歩です。学生たちは子どもたちの学習支援に加え地域の活性化へ貢献しながら、小規模校や複式学級の教育実践を学び、塾や家庭教師のない環境や離島独特の教育ニーズなどについても、子どもの生活に寄り添いながら深く学んでいます。

今後、この体験的な学びを、新設科目「九州地域の教育フィールド研究」(離島・へき地研究プロジェクト)において総合的・分析的に捉え直し、問題解決に立ち向かう教員の実践的指導力へと高めていく必要があります。

人と人とのつながりが豊かさを生む

宗像市教育委員会
田中 一郎 教育連携コーディネーター

本事業は、大学と学校・行政、また地島では漁村留学を育てる会や漁業協同組合など、様々な機関及び関係の皆様の御理解と御協力で実施に至りました。たくさんのつながり(ブリッジ)が新しい試みを生み出し、教育を少し豊かにしたと考えます。

学習支援の機会が少ない地島において、参加した子どもたちの笑顔は印象的でしたし、大学生にとっても、島の生活やへき地教育の一端に触れ、学ぶことも多かったのではないでしょうか。今後も「特色あるへき地の学習支援事業」として、一層の充実を図り定着させていきたいと思います。

事業実施にあたり、学生の派遣に協力いただきました福岡教育大学と、真摯に取り組んでくれた学生の皆様に感謝申し上げます。

3.今後の展開

昨年度に参加した学生は、当時1～2年次と教育現場の体験はそれぞれ異なりますが、このボランティアをきっかけにして、空き時間に担当校に行くあるいは他の学校のボランティアに積極的に参加する姿が見受けられました。また、引き続き今年度も担当したいと希望する学生も少なくありません。

この事業を通して、宗像市内の小中学生の基礎学力向上はもちろんのこと、教員の卵である本学学生のさらなる成長につながることを期待しています。

第16回 福教大卒 OB★OG紹介

授業の様子①

授業の様子②

大学時代の部活の仲間たちと

ミニバスでかかわる子どもたちと

学び続けること

教師の魅力は、可能性ある目の前の子どもたちの成長にかかわれることだと思います。　子どもは、学ぶことで日々成長し自分の可能性を広げていきます。「わかった!」「できた!」と目を輝かせて喜ぶ子どもの成長の姿は、何よりも嬉しい瞬間です。

子どもたちに「学ぶ力」を育てるためには、教師自身が学び続けることが最も大切だと考えています。学び続けることは、社会の変化に対応することであり、子ども理解を深めることであり、教師として働き続けることです。　自分を謙虚に見つめ、変える勇気をもって挑戦できる「よき学び手」になれるように努力し続けていきたいと思います。

教師が「よき学び手」となる時、きっと目の前の子どもたちが「よき教え手」になってくれると信じています。

つながりを大切に

人は一人で生きているわけではありません。人は多くの人とつながって生きています。

当たり前のようですが、大切なことはそのつながり（ご縁）を大切にしたり、感謝したりできるかということだと思います。

そのように、考えてみると私自身多くの先生方や先輩方にお世話になってきましたし、今も支えていただいています。

また、みんなで取り組むからこそ大きな喜びを感じることもありました。

みんなでやるから大きな力になった。

みんなでやるから楽しくできた。

みんなでやるから諦めずにできた。

このような、みんなでやる経験を大切にしていくことで、つながりが生まれるのだと考えています。

はじめからつながりがあるわけではなく、何かに自分が取り組むからこそできる、「つながり」を大切にしていきたいと思います。

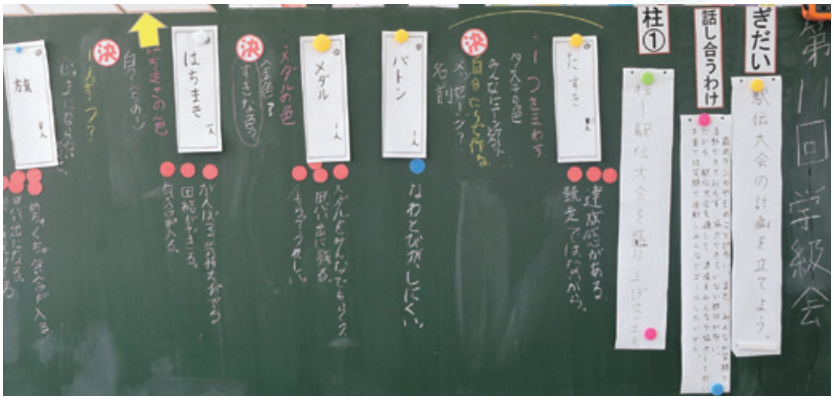
教職を志す教育大生へ

毎年、附属小学校には教育実習生がやってきます。悩みながらも教生先生として3週間を終えた学生が、数年後、採用され堂々と授業をしている姿を見ることがあります。若いみなさんの力がこれからの教育を支えます。

「福教大出身です。」「学籍番号は…」という会話が増えることを願っています。

福岡教育大学附属久留米小学校
教諭 磯田（いそだ） 哲郎（てつろう）さん
平成13年3月
小学校教員養成課程
保健体育専修卒業

学級目標



第11回学級会

係活動

今年で教師になって3年目になります。1年目は分からないことばかりで、授業づくりや子どもとの関わり方など、周りの先生方からたくさんのことを教えていただきました。1年目に出会った先生方が今の私の教師としての基盤を作ってくださったと感謝しています。

2年目は5年生を担任し、3年目の今年は持ち上がりの6年生です。子ども達が大人になり社会に出た時のことを考え、指導していくことが大切だと日々感じています。

子どもたちが毎日楽しいと思える学級を目指して

子ども達が学校にいる時間はなんと約8時間。1日の3分の1を学校で過ごしています。学校にいる時間をいかに楽しくできるか、この仲間と一緒にいたいと思えるか、ということがとても大切だと感じています。そして、子ども達には自分がいる集団や学級を自分たちで楽しくする力を養ってほしいと思っています。

私は教師になってから「特別活動」に出会いました。特別活動とは、自分たちでよりよい生活をつくったり、よりよい人間関係を築こうとしたりする力を養う時間です。自分から問題を見つけ、話合い、実践していく活動の中で、友達やクラスのよさが見え、一人一人の悩みを解決することにも繋がります。今受け持っている6年生とともに、去年からたくさんの活動をしてきました。お楽しみ集会、秋冬祭り、駅伝集会、ドッジボール集会、5－1卒業集会。準備をみんなで行い、みんなで集会を楽しむ。この活動を繰り返し行っていくことで、子ども達の中で学級への所属意識が生まれ、学級のために自分ができることを探すようになってきました。今子ども達は、福地小学校の一員である、6年1組の一員であることを自覚しているように感じます。

今できることを…（学生のみなさんへ）

学生時代には、いろいろなことに挑戦することが大切だと思います。私は大学時代にラクロス部に所属していて、部活動ばかりしていました。4年間の部活動の経験が仕事をしていく上で、役立っていることがたくさんあります。だからこそ、学生時代には自分の好きなことをして、いろいろな経験を積むことが大切だと思います。今しかできないことを、大学時代にたくさん経験してください。

直方市立福地小学校
教諭 井上（いのうえ） 尚子（しょうこ）さん
平成27年3月
初等教育教員養成課程
家庭選修卒業

ボランティアサークルが「学生ボランティア団体助成事業」に採択

本学のボランティアサークル「ゆかいくらぶ」が、一般財団法人 学生サポートセンターが募集する「平成28年度学生ボランティア団体助成事業」に採択され、5月31日(水)に開催された交流イベント「ナジック　ウェルカムパーティー2017」において表彰を受けました。

「学生ボランティア団体助成事業」とは、同財団が、「自由な発想と行動力によって、社会貢献を計画・実行している学生の団体を対象に、団体組織の活性化やネットワーク作りなどを経済的に支援し、社会貢献活動を応援する」という趣旨のもとに、全国の学生ボランティア団体に助成金を支給しているものです。

「ゆかいくらぶ」は、今年で創立24年目を迎えるボランティアサークルです。毎月一回、宗像市や福津市近辺の小学生とレクリエーション活動を通した交流を行っています。工作や調理、お出かけなどのレクリエーション内容を学生が企画し、運営しています。また、年度末に開催する保護者会で、保護者の皆様からご意見を伺い、活動内容や運営の改善を行っています。昨年度は、大学ネットワークふくおかが主催する学生地域活動大賞において、優秀賞を受賞しています。

今回の採択・表彰を受けて、「ゆかいくらぶ」の嶋田浩一さん(初等教育教員養成課程 社会科選修 4年)からは、「今回の表彰、大変光栄に思います。これからも子ども達が楽しめる場を提供できるように活動していきます。また、ゆかいくらぶの活動を通した貴重な経験や学びを活かし、子ども達や保護者の方々に信頼される教師を目指していきたいです。」とのコメントがありました。

なお、「学生ボランティア団体助成事業」には、本学から過去に「サマーキャンプ」(平成27年度)、「てくてく　とことこ」(平成26年度)、「こばとの会」(平成25年度)、「あすなろの会」(平成24年度)、「ひまわり会」(平成23年度)、「オアシス」(平成22年度)が採択され、表彰されています。

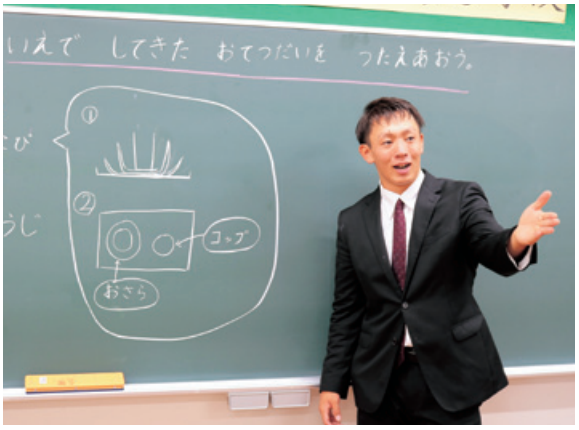
表彰の様子

団体紹介の様子

表紙モデルの福教大生☆

今号の表紙は、昨年9月末から3週間、本学の附属福岡小学校で教育実習に参加した、和田将輝さんにご登場いただきました。

和田さんは、「教育実習では、なかなか自分が実践したかったことが子供たちに伝えきれずに苦労しました。また、指導を受けた附属学校の先生方から、誰に対しても謙虚に接することの大切さを教えられました。そのことは、今でも強く自分の心に響いています。子供とふれ合うことで、理論を実践に結びつけていくことへの大切さを感じました。教育実習を通じて教職への思いがさらに強くなり、絶対に教員採用試験に合格したいという気持ちになりました。」と力強く語ってくれました。



和田　将輝さん
初等教育教員養成課程
数学選修4年

キャンパスからの便り Campus letter

同窓会 城山会（じょうやま）

平成29年度事業予定

○第42回定期総会
日 時：平成29年4月29日（土） 11：00～
会 場：八仙閣本店
総 会：顧問、4支部代表者（長崎、宮崎、山口、熊本）、福岡県内28支会代表者　約150名参加
懇親会：大学役員、顧問、大学支援委員役員、後援会会長、小・中学校長会会長、城山会会員

○夏期研修会
日 時：平成29年8月6日（日） 13：30～
会 場：福岡リーセントホテル

○新卒・若手情報交換会
日 時：平成29年10月28日（土）
会 場：大学アカデミックホール 10：00～
共通講義棟 13：00～

学生の皆様の参加をお待ちしています。

○第17回 新年の会
日 時：平成30年2月4日（日） 11：00～
会 場：サンヒルズホテル博多

新卒・若手情報交換会

福岡教育大学同窓会城山会事務局
TEL・FAX 0940-33-2211
e-mail:jouyamakai@able.ocn.co.jp

健康科学センター

MESSAGE No.113　2017春号

今回の内容は、「やる気orうかれ気分」、「マイ腰痛ヒストリー」、「インナーチャイルドを癒す」、「私の温泉三昧」、「悩みながら自分を知る」、「腸内環境を整えよう」、「腸内細菌を増やす食事」、「ちょっとしたこと」など盛りだくさんです。表紙は芸術課程3年の緒方 碧さんのデザインです。また、今回よりカバンに入れやすい大きさ（B５サイズ）に変更しました。是非手にとってご覧ください。

健康科学センターHP
http://ww1.fukuoka-edu.ac.jp/~hokenctr/index.html

後援会

平成29年度保護者説明会のご報告

今年度の県外での保護者説明会は、6月3日の宮崎から始まり、鹿児島、山口、佐賀と行いました。大学より就職状況や就職支援についての説明があり、その後学年毎に分かれて懇談会をしました。懇談会では保護者同士の情報交換や要望など参加者で共有することが出来ました。

来年は、長崎、熊本、大分、広島と計画をしています。ぜひご参加ください。

後援会事務局
TEL・FAX：0940-33-8070
e-mail: kouenkai@eos.ocn.ne.jp

福岡教育大学の広報ビデオを作成しました

福岡教育大学の『特色』や『強み』、また『教職のすばらしさ』を知っていただくため、高校生や保護者の方を対象に、広報ビデオ（一般向け、高校生向け）を作成しました。

両ビデオとも、福岡教育大学の『魅力』がぎっしりつまっています。本学ホームページ（動画で見る）で公開していますので、是非ご覧ください。

広報ビデオ（一般向け）

広報ビデオ（学生向け）

Joyama 通信 vol.39

福岡教育大学広報誌第39号
2017年7月21日
編集発行: 国立大学法人 福岡教育大学
経営政策課

福岡教育大学
イメージキャラクター
フッキー

〒811-4192　宗像市赤間文教町1-1
TEL.0940-35-1205
FAX.0940-35-1259
e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp
ホームページ:
https://www.fukuoka-edu.ac.jp/

携帯電話サイト　Twitter　YouTube

編集後記

■特集1では、大学4年間を通した本学の教育実習の内容と教育実習での学びがどのように学生の実践的指導力の育成につながっていくかについて、それぞれの学年における教育実習を体験した学生の声を盛り込みながら紹介しています。
また、本年4月から小学校教諭として赴任した先輩から、4年生に体験する「教育総合インターンシップ実習」を体験した感想や教員を目指す後輩へのメッセージをいただきました。

特集2では、教育の一環として位置づけて、推進している本学の学生ボランティア活動について紹介しています。ボランティア活動に参加した学生の感想や4年間ボランティア活動に取り組み、本年4月から小学校教諭として赴任した先輩から、ボランティア活動の経験がどのように生きたかについて、メッセージをいただきました。また、ボランティアを受け入れていただいている校長先生や学生を支援している本学ボランティアコーディネーターからのメッセージも紹介しています。
本学は、教育実習や学生ボランティア活動を通して、教師に必要な教育実践力の向上に向けて、様々な取組を実施しています。

（広報編集部）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。